

論文

ロバート・ルイス・スティーヴンソンの旅行記『旅はロバをつれて』と 南仏ジェヴォーダン

中川 久嗣*

1. スティーヴンソンとフランス

ロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-1894) は、スコットランドの作家で、たとえその名を聞いただけではすぐに分からなくとも、『宝島』(1883年)や『ジキル博士とハイド氏』(1886年)といった彼の作品の名前は、世界中の誰もが知るところのものであろう。スティーヴンソンは、1850年にスコットランドのエディンバラで生まれた。病弱な幼少期から青年期を、たまにスコットランド、イングランド、ドイツなどを旅行する以外は、もっぱらエディンバラで過ごした。25歳で弁護士資格を取得後、28歳の時に最初の単行本である『内地の旅』(1878年)を出版し、それ以降、小品を次々と書き始めた。29歳から30歳にかけて、健康状態が悪化するなか(結核)、アメリカ人女性ファニー・オズボーンと結婚しアメリカを旅行したりしている。33歳の時に代表作『宝島』が出版された。さらに36歳で『ジキル博士とハイド氏』を世に送り、スティーヴンソンの名前は世界的に知られるようになった。1888年、38歳の時に南太平洋の旅に出て、翌1889年にはその旅の際に気に入ったサモアに住むようになり、そこで執筆活動を続けた。しかし温暖なサモアでの生活もスティーヴンソンの健康状態を完全なものとするのではなく、1894年に脳溢血のためサモアで帰らぬ人となった。44歳であった。

スティーヴンソンの生涯は、世界中あちこちを回る旅に彩られていた。私たちの目を引くのは、やはり南太平洋への旅であろう。海洋冒険作品である『宝島』を地で行くように、最初にアメリカから南太平洋に出発したのは、先にも触れたように彼が38歳になった1888年のことであった。フランスのポスト印象派の画家ゴーギャンが、南仏アルルでのゴッホとの共同生活が破綻したのちに、最初にタヒチへ向けて出航したのが1891年(43歳)のことなので、まさしく同じような時期に同じように南太平洋に向かい、そして最終的に二人ともその地で生涯を終えたということには、やはり何かしら感慨深いものがある。スティーヴンソンもゴーギャンも、近代化・産業化が急速に進むヨーロッパの文明社会を遠く離れて、南海の孤島にそれぞれの理想郷ともいべき自然の地を見いだしたのであろうか。

スティーヴンソンはそもそも幼い頃から病弱であったため、晩年を迎える前までにも(つ

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

まり南太平洋に出かける以前にも)、病気療養を兼ねてあちこちに旅行に出かけたり、また保養のための滞在をしたりしている。故郷のスコットランドやイングランドは言うに及ばず、ベルギー、フランス、ドイツ、スイス、アメリカなどである。中でもフランスへの旅行は何度もあり、スティーヴンソンにとってフランスはお気に入りの国であったと思われる。パリやフォンテーヌブロー、そして療養にはもってこいと思われる(実際医師に勧められた)南フランスのマントンやイエール、マルセイユなどである!。この頃スティーヴンソンの持病は呼吸器疾患であった(あるいは結核と考えられていた)ので、南フランスの温暖で湿度の低い気候は、彼にはおそらくうってつけだったのであろう。1873年、23歳の時に滞在したマントン(Menton)は、イタリア国境に近い、いわゆるコート・ダジュールの風光明媚な港町で、18世紀後半から19世紀にかけて、イギリス人が滞在する高級リゾート地として脚光を浴びるようになっていた(マントンは、スティーヴンソンが滞在する12年前まではモナコ公国に属していた)。また1883年、33歳の時に住んだイエール(Hyères)も、コート・ダジュールの西端にある保養地のひとつで、地中海に突き出た大きなジアン半島の付け根にあたる。スティーヴンソンは「孤独の家(La Solitude)」というスイス風のシャレーに妻とともに滞在した。このシャレーはイエールの「ヴィクトル・バッシュ通り4番地(4, rue Victor Basch)」で、旧市街を見下ろす高台にあった。現在そこにある建物は、屋根や窓の感じがスティーヴンソンの住んでいた当時のシャレーの面影を多少とも残している。なお、代表作である『宝島』が出版されたのはこの年のことであった。

こうして生涯にわたって数多くの旅を経験したスティーヴンソンであるが、1878年に南フランスのジェヴォーダン・セヴェンヌ地方を巡った28歳の時の徒歩旅行については、他の多くの旅行に比べると、それほど知られているものであるとは言えない。この旅行は他のゆっくりとした療養旅行などとは違って、およそ健康に自信のない病弱な人間にはとても無理なのではないかというような行程の旅であって、標高1000メートルを超えるような過酷な土地を、しかもかなり寒くなった秋(9月後半)という季節に、野宿を続けながら短期間で踏破するという強行日程によるものであった。そして何よりもこの旅は、スティーヴンソンが1頭のメスのロバとともに歩くというユニークな旅でもあったのである。

スティーヴンソンはちょうどこの旅の2年前の1876年に、後に結婚することになるアメリカ人女性ファニー・オズボーンとフォンテーヌブローで出会っている。年上で既婚者のファニーには子どもが二人いたのだが、彼女が夫との離婚手続きのため故郷のアメリカに帰国した後、すぐにこのロバとの徒歩旅行に出かけたのであった。スティーヴンソンはこの旅の翌年1879年、彼女に会いにアメリカに渡り、さらにその次の年1880年には前夫と離婚した彼女と結婚している。したがってスティーヴンソンの南仏での単独徒歩旅行は、愛する女性との出会いから結婚に至るちょうどその間に行われたのであり、しかもその女性が一時的であれ彼のもとから遠くへ離れた直後にその決行が決断されたものであった。その際のスティーヴンソンの心の有り様は、私たちにはただ推測するだけしかできないのであるが、愛する女性と離ればなれになってしまった孤独、そしてまたその孤独のうちに、忘れがたい彼女への

愛情を自己の中であらためて確認しようとする気持ち、そうした心情が、彼をして孤独な旅へと駆り立てたのであろうか。孤独な旅といっても、スティーヴンソンには旅の伴侶として一頭のメスのロバが付き従っていた。あるいはこの旅の伴侶の存在が、人生の伴侶たるファニーへの気持ちを常に呼び覚まし、それを再確認させることになったのかも知れない。

1878年の夏、スティーヴンソンは南フランスのオーヴェルニュにやって来た。この地方は、彼が日頃から愛読していたジョルジュ・サンドの作品（『ヴィルメール侯爵』その他）の舞台となったところでもあった。またジェヴォーダンやセヴェンヌ地方は、18世紀初めに起こった「カミザール戦争」と呼ばれるフランス・プロテスタントの反乱について彼が個人的に強い関心を抱いていた場所でもあった。そのようなわけで、彼が最初に滞在したのはオーヴェルニュのル・モナステイエ（Le Monastier）であった。彼はここにおよそ1ヶ月滞在した後、ガール県のアレス（Alès）へ向けて、ロバを連れた徒歩旅行に出発するのである。

ここでスティーヴンソンのこの「ロバ旅行」の行程を確認しておく。ル・モナステイエを発ったのが1878年9月22日（日）で、現在のロゼール県東部を北から縦断する形で南下し、最終的に10月4日（金）にアレスに到着している。都合13日間の旅であった（そのうちロバと旅したのは12日間である）。

【第1日】1878年9月22日（日）

Le Monastier-sur-Gazeille→Saint-Martin-de-Fugères→Goudet→Ussel
→Le Bouchet-Saint-Nicolas [宿屋泊]

【第2日】9月23日（月）

Le Bouchet-Saint-Nicolas→Pradelles [昼食] →Langogne [宿屋泊]

【第3日】9月24日（火）

Langogne→Sagne-Rousse→Fouzillac (Fouzilhic) 付近 [野宿]

【第4日】9月25日（水）

Fouzillac 付近→Cheylard-l'Éveque→Luc [宿屋泊]

【第5日】9月26日（木）

Luc→La Bastide-Puylaurent→L'Abbaye Notre-Dame-des-Neiges [修道院泊]

【第6日】9月27日（金）

L'Abbaye Notre-Dame-des-Neiges→Chasseradès [宿屋泊]

【第7日】9月28日（土）

Chasseradès→L'Estampe→sommet de Goulet→Le Bleymard→Mont de Lozère [野宿]

【第8日】9月29日(日)

Mont de Lozère→sommet de Finiels→Le Pont-de-Montvert→La vallée du Tarn [野宿]

【第9日】9月30日(月)

La vallée du Tarn→La Vernède→Cocurès→Florac [宿屋泊]

【第10日】10月1日(火)

Florac→La vallée de la Mimente [野宿]

【第11日】10月2日(水)

La vallée de la Mimente→Cassagnas→Saint-Germain-de-Calberte [宿屋泊]

【第12日】10月3日(木)

Saint-Germain-de-Calberte→Saint-Étienne-Vallée-Française→Saint-Jean-du-Gard [宿屋泊]

【第13日】10月4日(金)

Saint-Jean-du-Gard→[馱馬車]→Alès

スティーヴンソンは、この旅の記録を『旅はロバをつれて』という旅行記として1879年に出版した。原題は、*Travels with a Donkey in the Cévennes* (1879) である²。フランス語の翻訳版は、同年に *Voyage avec un âne dans les Cévennes* というタイトルで出版されている。筆者(中川)は、たまたま2013年と2014年に、同じコースをたどっている(ただし筆者の場合は残念ながら徒歩ではなく自動車であるが)、以下、スティーヴンソンの旅の行程にそって、彼の旅行記の内容にさらに詳しい実地の情報等を補足しつつ、彼のロバ旅行を再確認し、最後にこの旅行記のうちに見いだせるスティーヴンソンの思想と文明論について検討してゆきたい。なお、この『旅はロバを連れて』は、吉田健一氏による邦訳(1951年)がある³。引用などは基本的にこの吉田版を用い、『ロバ』と略記して邦訳、英語版の順でページ数を並記した。また引用にあたっては、吉田訳を現代語にあらためるなど、必要に応じて一部分変更を加えている。

2. ヴレイからジェヴォーダン・ロゼール山まで

スティーヴンソンがロバと共に歩く旅の出発地としたル・モナステイエ (Le Monastier) は、

オート＝ロワール県のル・ピュイ＝アン＝ヴレイ (Le Puy-en-Velay) から南東におよそ 20 キロ、アルデッシュ県の県境まではおよそ 12 キロに位置する地方小都市であり、ヴレイ (Velay) 地方の南部にあたる。ロゼール県南東部にもル・モナステイエ＝パン＝モリエス (Le Monastier-Pin-Moriès) があるが、それと区別するために、現在ではル・モナステイエ＝シュル＝ガゼイユ (Le Monastier-sur-Gazeille) という。ル・ピュイから来た地方街道 (現県道 D535) が丘陵の山腹を走り、その道に沿って家々が並ぶ。天候に恵まれ湿度も低いために、かつては呼吸器疾患の療養所があった。スティーヴンソンはここに約 1 ヶ月滞在したが、この気候の良さも滞在の理由のひとつであったのかも知れない。街の中心には 14 世紀に建てられ 16 世紀に再建された城 (大きな円塔が並ぶ) と、11 世紀から建設が進められたベネディクト派の修道院教会がある。街の名前にもなったこの僧院 (修道院) の教会は、その西ファサードが、赤と白の石積み、縞模様のアーチなど、ル・ピュイのノートル＝ダム大聖堂 (Cathédrale Notre-Dame-de-l'Annonciation) とよく似ており、オーヴェルニュ地方の典型的な作りになっている。

19 世紀後半は地方鉄道の建設が各地で進められた時代で、オーヴェルニュからラングドックにかけてもいくつもの線の建設が「パリ・リヨン・地中海鉄道会社」(PLM) によって企画・実行されていた。鉄道建設のおかげで、人やモノの移動はそれまでの時代に比べて飛躍的に容易になりつつあったのだが、ル・ピュイからル・モナステイエをへてランゴーニュに向かう線の建設は 20 世紀に入ってからのことで、スティーヴンソンの時代にはいまだ開通していなかった。そのようなわけで、ヴレイからジェヴォーダンへ向かうスティーヴンソンの徒歩旅行は、ル・モナステイエの人々からはいまだ奇異な目で見られた。特にそれがロバを連れてのものであるというので、住民たちにとってはちょっとした見物物となったのであった (『ロバ』10-11 頁/p.101.)。

ロバの名前は「モデスティヌ」(Modestine) といった。スティーヴンソンはこのロバを、ル・モナステイエに住むアダン老人から 65 フランとブランディ 1 杯で譲り受け、野宿用のスリーピング・バッグをはじめ、衣類や食糧などの荷物を山のように載せて、9 月 22 日 (日) の朝、ル・モナステイエの街を出発した (『ロバ』15-16 頁/pp.104-105.)。

スティーヴンソンがこの旅でたどったコースは、現在は「自然遊歩道」(sentier de Grande Randonnée) として整備されている。ナンバー「GR70」がおおよそスティーヴンソンの歩いた道である。彼は、ル・モナステイエを出てこの「GR70」に沿ってサン＝マルタン＝ドゥ＝フジェル (Saint-Martin-de-Fugères)、グデ (Goudet)、そしてウセル (Ussel) の村へと進んでいった。ロバのモデスティヌの歩みは、運ぶ荷物が多かったこともあって最初はノロノロとしたものであった。スティーヴンソンは、ずり落ちそうになる荷物を支えながら、さかんにモデスティヌの尻を杖で打つのであるが、なかなか言うことを聞かない。途中出会った農民が茂みから折ったムチをくれたので、そのムチでモデスティヌを打ち続けた。さらに余計な荷物を捨てて軽くしたうえで、休みなく、かつ容赦なくムチをふるった。ヴレイの山間に、スティーヴンソンのふるうムチの音だけが鳴り響いていたという。モデスティヌ

にとっては、なんとも哀れで気の毒な話である（『ロバ』24-25 頁/p.110）。スティーヴンソンによると、ムチ打たれるモデスティヌの顔が、かつて彼に非常に親切にしてくれたある婦人にどこか似ていたので、自分の残酷さに気分が悪くなったようだが（『ロバ』21 頁/p.108.）、その婦人というのがアメリカに去ったファニー・オズボーンなのかどうかは、残念ながら私たちには知りようがない。その日の夜は、スティーヴンソンはル・ブーシェ=サン=ニコラ（Le Bouchet-Saint-Nicolas）という小村の宿屋に宿泊している。この日は、ル・モナスティエからほぼ西へ向かいル・ブーシェ=サン=ニコラまで、およそ 30 キロの行程であった。

第 2 日目（9 月 23 日）は、ル・ブーシェ=サン=ニコラを出て、ランゴーニュまで向かう。ル・ブーシェ=サン=ニコラは海拔 1200 メートルの高地にある村で、中ほどに 19 世紀に改築された教会が建っている。スティーヴンソンの宿泊した宿屋は、彼がそれまで泊まった宿屋の中でも目立って粗末なものであったという。しかしその宿屋の主人から、スティーヴンソンは、ロバのモデスティヌを早く歩ませるための、8 分の 1 インチ程度の針の付いた「突き棒」をもらった。それはてきめんに効果を発揮した。それでモデスティヌをひと突きするや、たちまちモデスティヌの足取りは速くなるのであった。あまり突きすぎると、モデスティヌの尻から血が流れたが、そんなことはお構いなしに、スティーヴンソンはモデスティヌを突きながら旅を急いだのであった（『ロバ』31-32 頁/p.115.）。その日はランゴーニュの北東およそ 8 キロにある小都市プラデル（Pradelles）で昼食をとり、その後アリエ川を渡ってランゴーニュに向かった。旅行記の邦訳（吉田訳）にはプラデスを出て 45 分後には「ランゴーニュの街への、険しい坂道を、突き棒でモデスティヌを追い立てていた」（『ロバ』34 頁/p.117.）とあり、急な上り道のような印象を受けもするが、実際はこれはランゴーニュのおよそ 5 キロ手前から始まる長い下り坂である⁴。この下り坂の道は、ヴレイ地方とジェヴォーダン地方の境界にあたる。現在ではオート=ロワール県、アルデッシュ県、そしてロゼール県と、3 つの県の県境が接する場所にあたる。スティーヴンソンは、ランゴーニュに着くことで、ジェヴォーダン地方（ロゼール県の古い呼び名）に入った。ここは有名な 17 世紀の「ジェヴォーダンの獣」と「カミザール戦争」（フランス・プロテスタントの反乱）の地である。

第 3 日目（9 月 24 日）、ランゴーニュの宿屋で、ジェヴォーダン最初の夜を過ごしたスティーヴンソンは、旅行記によればお昼過ぎまでそこに留まっている。ランゴーニュ（Langogne）はジェヴォーダン北部では中規模の地方都市であり、中世まで円形の城壁の中に、創建が 10 世紀にさかのぼる修道院とそれに付属する大きなサン=ジェルヴェ=エ=サン=プロテ教会

（Église Saint-Gervais-et-Saint-Prottais）があった。ランゴーニュの街はこの修道院とともに発展したのである。スティーヴンソンの時代にはこの修道院自体はすでに破壊されてなくなっているが、教会の方は残っている。内部にはロマネスク時代のユニークな柱頭彫刻が見られる。しかし旅行記にはこれを見たという記述はない。スティーヴンソンは 14 時半にモデスティヌとともにランゴーニュを出発した。

この日の目的地は、ランゴーニュからサン=フルール=ドゥ=メルコワール

(Saint-Flour-de-Mercoire) を経由してシェイラルール=レヴェック (Cheylard-l'Évêque) ⁵までおよそ 14 キロの行程であったが、悪天候のため、サン=フルール=ドゥ=メルコワールからサーニユールス (Sagne-Rousse) を過ぎたあたりで道に迷ったようである。メルコワールの荒涼とした土地を進むうち、スティーヴンソンは 10 頭以上の牛と、それと同じくらいの数の子供たちに遭遇している。「彼らは黙って輪を作って歩き回っていて、時には手をつなぎ合わせ、時にはお辞儀をした後で何人かずつに切れて分かれた。子供の踊りは我々を無邪気な、快活な考えに導くものであるが、日が暮れようとしている時の沼地でのそういう踊りは、見ていかにも薄気味悪かった。」 (『ロバ』 39 頁/pp.121-122.)

日暮れの荒涼とした沼地で 10 人以上の子供たちが輪になって踊るといふ、なんとも不思議かつ不気味な光景である。寂しい寒村がわずかに点在するだけのメルコワールの薄暗くなりつつある森地で、いったいなぜこんな人数の子供たちが輪になって踊っていたのか。スティーヴンソンの見たこの光景はいったい何だったのであろうか。実は、サン=フルール=ドゥ=メルコワールとシェイラルール=レヴェックのちょうど中ほど、メルコワールの森の中のレ・ショワジネ (Les Choisinets) という場所に、かつて大きな孤児院 (orphelinat) があつた。19 世紀半ば (1859 年) に、ランゴーニュのアントワーヌ・ファヴィエ神父が子供のいないこの場所の所有者から土地を譲り受けて作られたものである。孤児院は 4 階建ての大きな建物で、1863 年からは孤児院付属の大きな聖堂も建設されている。スティーヴンソンがメルコワールの森で道に迷った時には、この孤児院には子供たちが収容されていたのである。建物や教会の規模から、かなり多くの収容者がいたと思われる。これはあくまでも推測の域を出ないのではあるが、スティーヴンソンが見たという、輪になって踊る子供たちというのは、実はこの孤児院の子供たちであったのかも知れない。その可能性は少なくないのではないかと思われる。孤児院はその後 1904 年と 1926 年に起きた大きな火災によって被害を受けて廃止され、聖堂も廃棄されてしまった。現在、内部が焼け落ちて残った孤児院の壁が 3 階部分まで残っており、そこに虚空を見上げる四角い窓が並んでいる。当時の孤児たちは、この窓からメルコワールの森の光景を見ながら、いったいどんなことを思っていたのであろうか。そしてその孤児たちのその後の人生は、いったいどんなだったのであろうか。現在、この孤児院の遺構は、地元ル・ショワジネ協会が資金を集めながら、修復・保存活動を行っている⁶。

さて、こうして森の中をさまよったスティーヴンソンは、フジヤック (Fouzillaç) の村にたどり着き、道案内を頼むが拒まれてしまい、仕方なくこの村の近くの森の中に入り、その夜は森の木々を震わせる風の音を聞きながら野宿したのであつた。

第 4 日目 (9 月 25 日)、空を染める明け方の青い光とともに目覚めたスティーヴンソンは、野宿をした森を出てシェイラルール=レヴェックに向かった。旅行記によれば、シェイラルール=レヴェックは通りと言えるようなものもなく、所々に家がかたまつて建っている寂しい村であつた。小さな丘の上には「すべての美德を有する我が聖母」の御堂、そして村の中には「小さな、壊れかかった教会」 (the diminutive and tottering church) があり、村人たちによるその前の年の寄付の額が記された板が掲げてあつたという。スティーヴンソンはこの村の粗末な

宿屋で食事をしている（『ロバ』50-52 頁/pp.129-130.）。シェイラール=レヴェックは、現在でもやはり小山に囲まれた谷間にある小さな寒村といったところであるが、ランゴニューからグレ山地 (montagne du Goulet) へ向かうランドネ (高地ハイカー) たちの中継地点ともなっている。村を見おろす岩山の上にはスティーヴンソンが書いているように、聖母に捧げられた礼拝堂 (Chapelle Notre-Dame-de-toutes-les-Grâces) が建っている。小さな単身廊に半円形の後陣が続くだけの作りで、建設は1862年であるから、スティーヴンソンがこの村を訪れる少し前のことであった。この地方をめぐる巡礼たちもこの礼拝堂を訪れたという⁷。

スティーヴンソンの見た「小さな、壊れかかった教会」は、この村のほぼ中ほどにある道路の交差点に面して建っていて、その西ファサードの上には横2連式の鐘楼が載る。大きめの丸窓の下には半円アーチのかかるポルタイユが開いている。内部は単身廊形式で、切妻形の屋根は木製である。また後陣 (聖堂東壁) は四角形である。この聖堂は建物全体がスティーヴンソンの訪れた19世紀頃に修復・再建されたものである。少なくとも現在は彼が言うように壊れかけてはいない。旅行記にあるような寄付金の板なるものは、もちろん見当たらない。ファサードの上に載っている鐘楼は12世紀のもので、この村から約4キロ南にいったところにあったメルコワールのシトー派女子修道院 (Ancienne abbaye de Mercoire) から移されたものだと言われている (現在その女子修道院は建物全体が個人所有の農家となっている)⁸。

シェイラール=レヴェックを出発したスティーヴンソンとモデスティーヌは、西へ約10キロ、山をひとつ越えたところにある、アリエ川沿いの村リュックへ向かった。しかしこの10キロはスティーヴンソンにとって過酷な歩みであったようである。荒涼としたこのあたりの景色が彼をして非常に陰鬱な気持ちにさせている。「その日通ったところは、世界で最もみずばらしい地方に思われた。スコットランドの高原地帯の一番悪い部分のようで、それよりもっと悪かった。寒くて、風に吹きさらされ、みじめで、木にも、ヘザアにも、動物にも乏しかった。」（『ロバ』53 頁/p.130.）今日そのルートをたどってみると、そこで見られる光景は、実際はロゼールの他の高原地方のそれとさして変わるところはない。山越えの高低差もそれほどあるわけではない。スティーヴンソンがこの道を歩いた時には、よほど天候が悪く、吹く風が冷たく強烈であったのであろう。風は常に片手でモデスティーヌに乗せた荷物を押さえておかなければならないほどであった。

「世界で最もみずばらしい」山を越えて、スティーヴンソンとモデスティーヌは、リュック (Luc) の村に着いた。ここはアリエ川と並んで通る古くからの「レゴルダヌの道」 (chemin de Régordane) 沿いに南北に家々が並ぶ細長い村である。スティーヴンソンはアリエ川とリュックの村の様子を「これくらい醜い景色が他にあるとは思えない」（『ロバ』54 頁/p.131.）と書いている。よほどこの日の天候が悪かったと思われる。彼はリュックの村については、重量5000キロの大きくて白い聖母像が載ったリュック城の廃墟くらいしか見るべきものはないとも書いている（『ロバ』54-55 頁/p.131.）。

スティーヴンソンが見たリュックの城は、現在でもその遺構が村のすぐ西の山の中腹にある。中世期にはランドン男爵領に属した。その後、一時ポリニヤック家の所有となるが、百

年戦争期には傭兵団に占拠されるなどした。17世紀になってリシュリユーの命により破壊された。方形の塔（ドンジョン）は13世紀のものである⁹。今でもこの塔の上には白くて大きな聖母像が載せられていて、リュックの村とアリエ川を高めから見下ろしている。またリュックの村には南地区にサン＝ピエール教会（Église Saint-Pierre de Luc）がある。横幅のある西ファサードは鐘楼壁（1306年）となっており、横2連式のアーケードの上に頭頂部が三角形の小さな鐘楼が1つ載っている。聖堂の外部は、身廊部南側に太いコントルフォール（扶壁）が4本つき、その扶壁の間の各ベイには、外に向けて大きく隅切りされた半円頭形の大きさの異なる窓が、上下2段になって開けられている。教会の東端には五角形の後陣が付き、ロマネスク様式の柱頭彫刻の施された小円柱に挟まれて半円頭形の窓が開いている¹⁰。スティーヴンソンの旅行記には、残念ながらリュックのこの古い教会についての言及は見られない。

第5日目（9月26日）の朝、リュックの宿屋を出発したスティーヴンソンとモデスティヌは、アリエ川沿いに南下し、ラ・バステード＝ピュイロラン（La Bastide-Puylaurent）から少しだけ東に入ったところにあるトラピスト修道会の「ノートル＝ダム＝デ＝ネージュ修道院」（雪の聖母修道院／L'Abbaye Notre-Dame-des-Neiges）に着いた。ここは現在のアルデッシュ県にあたる。スティーヴンソンはこの修道院に宿泊し、同宿した司祭と元少佐から、カトリックへの改宗を説得されて困っている（『ロバ』77-78頁／p.147-148）。またこの修道士たちの禁欲的な生活ぶりを見て、自由に恋愛が出来る自分自身の身の上にあらためて感謝している（『ロバ』73頁／p.144）。この時にスティーヴンソンの念頭にあったのは、おそらくはアメリカに去ったファニーのことであったであろうことは想像に難くない。

第6日目（9月27日）は、昼まで修道院にとどまり、昼食後にふたたびジェヴォーダン（ロゼール県）に向けて出立した。そしてその日のうちにシャスラデス（Chasseradès）の宿屋に到着している。この日スティーヴンソンが歩いたのは、ノートル＝ダム＝デ＝ネージュ修道院からラ・バステード＝ピュイロランを再び経由して、そのあとはほぼ現在の県道D6をアリエ川ぞいに東進するルートであったと思われる。このルートには、19世紀後半にはランゴニユとマンドを結ぶ鉄道が走るが、スティーヴンソンが歩いた時にはまだ建設中で開通していなかった。シャスラデスはラ・バステード＝ピュイロランからはおよそ10キロに位置する小村である。県道から200メートルほど北に入ったところに村の中心がある。そこには、方形の高い鐘塔を持つロマネスク時代にさかのぼる教会がある。後陣は五角形で、身廊東側から南側にかけては、斜面に面しており、とりわけ南側の側壁には、露出した片岩の塊の上に教会へのポルタイユが開いている¹¹。もちろんこのポルタイユは現在では使われていない。スティーヴンソンの旅行記にはこの教会についての記述は見当たらない。

第7日目（9月28日）はシャスラデスからロゼール山北面までの行程である。狭い相部屋の宿屋で早朝に目覚めたスティーヴンソンは、ほどなくモデスティヌとシャスラデスを後にし、「急な斜面に沿って家が建っている村」を通り抜けてシャスザック川の渓谷に下りた後、レタンブの村に至る（『ロバ』85頁／p.154）。この「急な斜面」の村とは、シャスラデスのすぐ東にあるミランドル（Mirandol）の集落であると思われる。そこから南にすぐの

レタンブ (L'Estampe) は、シャスザック川をはさんでグウレ山 (montagne du Goulet) の北側にある小村である。ミランドルの村よりもさらに規模が小さな村である。ステューヴンソンは、このあたりで羊飼いの笛の音を聞きながら山道を登っている。ステューヴンソンが通ったというグウレ山の山頂は、標高にして 1497 メートルである。ただし現在の GR70 は、この山頂の少し西を通過してブレイマールに下りてゆくので、そちらを通ると峠の標高は 1413 メートルであり、多少低くなる。

この日のステューヴンソンの歩みはかなり早く、ル・ブレイマール (Le Bleymard) で昼食をとったあと、さらに歩みを進めて、先に越えたグウレ山よりもさらに高いロゼール山 (Mont de Lozère) の北側斜面まで行っている (『ロバ』 87-91 頁/pp.156-159.)。「突き棒」のおかげか、この日のモデステューヌの歩むスピードは速かった。ル・ブレイマールは、現在の県道 D20 と D901 が交わる場所に位置するが、村の中心はその交差点から約 400 メートル南に行ったところである。かつての細い旧道沿いに家々が並んでいる。交差点から D901 を西へ約 1 キロ行くと、最初の建設が 12 世紀にさかのぼるサン=ジャン礼拝堂 (Chapelle de Saint-Jean-du-Bleymard) がある。D901 をはさんで反対側に今でも建つ小修道院に付属する聖堂であった。ゴシック様式の西ファサードの東側には 2 つのベイからなる身廊が続き、後陣は五角形である。ステューヴンソンは、グウレ山からまっすぐ南下してこの村の旧道を通り、食事だけ済ませてさらに南に向かったものと思われる。しかしこの日はロゼール山を越えることはなく、その北側の恐らくはマラヴィエイユ (Malavieille) から現在のロゼール山荘 (Le Chalet du Mont Lozère) にかけてのあたりの松林の中で野宿したのであった。銀河の星々を仰ぎ見ながらの、誠に美しい一夜であった。

3. ロゼール山からサン=ジャン=デュ=ガール、そしてアレスまで

第 8 日目 (9 月 29 日)、ステューヴンソンはまだ明け切らぬ暗い早朝に目覚め、ロゼール山の山越えに向かった。この山頂をステューヴンソンは「pic de Finiels」と書いている (『ロバ』 97 頁/p.164.)。これは現在のフィニエル山頂 (sommet de Finiels) で標高 1699 メートルである。ただしステューヴンソン・ルートをとる GR70 は「フィニエル峠」(col de Finiels) の方を通っているので、もしもステューヴンソンが実際に越えたのがこの峠の方であったとしたら、標高は 1541 メートルである。いずれにしてもそれなりに高さはあって、その頂は岩場がごろごろとして木々も少なく荒涼とした山越えの道であった。このあたりには今では冬場のスキー場もあり、ステューヴンソンが越えた 9 月の終わりという時期の早朝であれば、かなり気温も低かったことであろう。ロゼール山頂付近の北側は荒涼としているが、峠を越えて南側に入ると、森林が豊かとなる。

ステューヴンソンはモデステューヌとともにこの峠を越えて、カミザール戦争の地に入った。そしてロゼール山の南側の急な斜面を下ってル・ポン=ドゥ=モンヴェール (Le

Pont-de-Montvert) の村で昼食をとっている（『ロバ』102頁/pp.167-168.）。この地はカミザール戦争（プロテスタントの反乱）の引き金となった最初の事件が起こったところである。1702年7月24日のこと、セヴェンヌ地方の布教監督官であり、この村に住んでいたシェイラ神父（François de Langlade du Chayla/Chaila）が、日頃から新教徒に対して過酷な迫害を行っていたために、不満のたまっていたカミザール（プロテスタント）たちに襲撃されて殺された。スティーヴンソンは、その経緯について旅行記の中で詳しく説明している。

現在のル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールは、タルン川に架かる美しい中世の橋を中心に、山に囲まれて斜面に家々が立ち並ぶ比較的規模の大きな村（あるいは小さな街）である。スティーヴンソンがここに着いた時、最初に目に留まったのは「新教の教会」であったという（『ロバ』102頁/p.167.）。ル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールには、カトリックの教区教会と、新教の寺院（Temple protestant）がある。前者はラテン十字の平面プランで、スティーヴンソンと同じようにこの村の北からル・リューマレ川（Le Rieumalet）沿いに下ってくると、向かって右側の斜面に建っており、尖頭形の鐘塔が目につく。一方、後者は、川の東側のル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールの集落の中にあり、この村の墓地に隣接している。スティーヴンソンが目にしたのはやはりこちらであろう。村のクロズレ地区にあたる。この新教の寺院は、ルイ14世がナントの勅令を廃止したあと破壊されたが、1801年のコンコルダ（政教条約）のち1828年に再建された。平面プランは単純な長方形の箱形で、西正面は大きな丸窓を介してその上に三角形の切妻と、さらにその上に四角い小さな鐘楼が載る。単身廊形式の内部は、木製のヴォールトが架かり、身廊の左右にはやはり木製のトリビューンが付けられている。20世紀に入ってさらなる修復作業が行われていて一見して新しいという印象を受ける。スティーヴンソンは、ル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールの宿屋で昼食をとっているが、現在でもこの村の橋をはさんですぐ北側にはカフェ（レストラン）があり、南側にはホテル（レストラン付き）がある。スティーヴンソンがクラリスという美貌のウエイトレスを見ながら食事をしたのは、そのどちらかであったのであろうか（『ロバ』103頁/pp.167-168.）。ちなみにこの村には「ロバート・ルイス・スティーヴンソンの道協会」（Association sur le chemin de Robert Louis Stevenson）が置かれている。

ル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールを出発したスティーヴンソンは、タルン川沿いに現在の県道D998を西進するが、モデスティーヌの相変わらずのゆっくりした歩みもあって、ラ・ヴェルネード（La Vernède）に着く前に、タルン川渓谷（La vallée du Tarn）の斜面の、栗林のある小さな平地で野宿している。

第9日目（9月30日）は、早朝に近くを歩く農夫の気配で目覚め、タルン川の清水で顔を洗い、さらに西進を続けた（途中、女乞食や老人と話を交わしながら）。ラ・ヴェルネードは、ル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールからおよそ10キロ、タルン川に向けて落ちる斜面に十数軒の農家が集まる寒村である。そこからさらに西へ5キロでココユレス（Cocurès）である。ここはラ・ヴェルネードよりは規模が大きな村である。そこからこの日の目的地であるフロラックまではおよそ6キロであった。この日、スティーヴンソンはモデスティーヌとともにフ

フロラク (Florac) の宿屋に落ち着いている。宿屋では、訪ねてきたプロテスタントの牧師と宗教談義に花を咲かせている (『ロバ』 123-124 頁/pp.180-181.)。

第 10 日目 (10 月 1 日)、ステイーヴンソンは、夕方近くになってようやくフロラクを発った。ステイーヴンソン自身もモデスティヌも共に旅の疲労が重なってきていたようで、この日はミマント川 (La Mimente) の溪谷沿いに歩き、「観光客が喜びそうな古い城郭」を過ぎたあたりでほどなく野宿となった。ステイーヴンソンが目にしたという「城郭」は、ミマント川の北側の丘に残るサン=ジュリアン=ダルパオン (Saint-Julien-d'Arpaon) の城の遺構であろう。フロラクからは現在の国道 N106 を通って約 9 キロである。この村自体は 13 世紀にはフロラク男爵領を支配していたアンドゥーズ家が所有していた。17 世紀にはガブリアック家の所有となっていた城は、次の世紀にはモンカルム家のものとなるが、ほどなく荒廃し放棄された。現在は村を見下ろす小山の上に崩れかけた壁が残り、そこに開いた窓から虚空を見上げることができる。この村には城と同じように打ち捨てられた古い教会がある。ロマネスク期まで溯る歴史を持つ。この村がカミザールによって荒らされた際に被害を受け、後に再建されたようだが、現在は廢墟と化している¹²。

第 11 日目 (10 月 2 日) は、まだ星の光がかすかにまたたいている早朝に目覚め、出発している。ミマント川にそってカサニヤス (Cassagnas) まで行き、そこで昼食をとっている。この村の近くの山には、カミザール戦争の時、プロテスタント側の武器庫があったという。昼食の際には同席の者たち (カトリック信者) と宗教的な議論を行っている (『ロバ』 132-134 頁/pp.186-187.)。ステイーヴンソンはこの村を午後 2 時過ぎに出発すると、南に向かって急坂を登り、彼が「この地方の分水嶺」と呼ぶ頂に立ち、その広大な眺めを見渡しながらかミザール戦争による近隣の荒廃がいかばかりであったのかと過去へ思いをはせている (『ロバ』 134-135 頁/pp.187-188.)。この時、ステイーヴンソンがどのルートをとってこの「分水嶺」を越えたのかということについては、やはり正確には分からないのであるが、現在の県道 D62 は、カサニヤスからやや西に寄っているので、その可能性はあまり考えにくい。もっと東側のロピー峠 (col des Laupies) あるいはラ・ヴェルニヤス峠 (col de la Vergnasse) あたりであった可能性が高い。この日に到着しているのがサン=ジェルマン=ドゥ=カルベルト (Saint-Germain-de-Calberte) であることを考えると、恐らく前者のロピー峠かその西側あたりだったのではないかと思われる。ロピー峠から尾根沿いに南進すると、西の谷間にいくつか人家が点在する。「足下の谷間には村が一つか二つ、それから栗を栽培している農民の孤立した家が見えた」 (『ロバ』 136 頁/p.189.) という旅行記の記述とも合致する。また尾根道の「すぐ右手に [...] プラン・ド・フォンモール (Plan de Fontmort)¹³ の盆地があった」 (『ロバ』 135-136 頁/p.188.) と言われているが、ロピー峠のルートからはまさしくプラン・ド・フォンモールはすぐ右側に位置するのである。この日はすでに夕闇があたりを包み込み、ステイーヴンソンとモデスティヌは月光のもとで峠を下り、無事にサン=ジェルマン=ドゥ=カルベルトの宿屋にたどり着いている。

第 12 日目 (10 月 3 日)、宿屋で目覚めたステイーヴンソンは、朝の気分が良かったので、

宿屋の外を散歩している。この村はカミザール戦争の際、カトリック側の迫害者シェイラ神父が宣教の拠点の一つとしていたところであった。今は静かなこの村で、スティーヴンソンはかつての血なまぐさい歴史の記憶に思いをはせている。旅行記によれば、村の真ん中に「古い変わった格好をしたカトリックの教会 (quaint old Catholic church)」があり、ル・ポン=ドゥ=モンヴェールの殉教者シェイラが図書室と宣教師の集会所を置いたのはこの教会であったという (『ロバ』 139 頁/p.191.)。シェイラはル・ポン=ドゥ=モンヴェールでプロテスタントによって殺されたあと、この教会に葬られている。もともと 12 世紀にはここにロマネスク期の古い教会堂があったが、14 世紀に建て替えられた。16 世紀の宗教戦争の際には一時的にプロテスタントの寺院 (temple) として使用されたこともあった。シェイラの墓は教会内部の内陣左側の祭室の下にあるという¹⁴。現在この教会は、近年 (20 世紀以降) の修復によって外壁などがきれいに塗り直されていて、あまり「古い」という印象は受けない。「変わった格好」というのは、西正面ファサードのことであると思われる。方形で小さめの鐘塔が、三角形の切り妻風の壁の上に立ち、さらにその鐘塔の上には尖塔が載る。鐘塔の下は、ゴシック様式の大きなポーチとなっており、尖頭形の奥行きのあるアーチが上下二段構えとなっている (ポーチの左右にはそれぞれ細長く狭い、まるで銃眼のような開口部が付いている)。上の小さな三角形のアーチには奥に丸窓が開く。下の大きなアーチは中がポルタイユとなっており、尖頭形の 3 重のヴシュールがついている。このヴシュールを支える左右 3 本ずつの埋め込み円柱の柱頭部には、かなり摩耗が進んでいるが植物文様の装飾が施されている。この大きなポーチの開く正面下部から三角形の切妻風上部、そして一番上の尖塔部までの仕様が、通常のカトリック教会堂とは異なる一風変わった印象を与えるものとなっているのである。なお、教会内部は 4 ベイからなる単身廊に半円形後陣 (外部は五角形) が続く。4 番目のベイの南北には祭室がつく。横断アーチを受ける方形の付け柱が南北の壁に並ぶが、現在では、それらの柱と南側の付け柱の間の尖頭アーチがもとの片岩のまま残されており、それ以外の内部の壁はすべて最近になってきれいに上塗りされている。

スティーヴンソンはこの村から少し離れた場所で自然を満喫した後、村で昼食を食べ、午後 3 時過ぎにサン=ジェルマン=ドゥ=カルベルトを出立している。南東に向けてガルドン・ドゥ・ミアレ川 (Le Gardon de Mialet) に沿って進み、サン=テティエンヌ=ヴァレ=フランセーズ (Saint-Étienne-Vallée-Française) を過ぎ、そこから南に転ずると「長い、険しい坂道」をサン=ピエール峠 (Col de Saint-Pierre) に向けて登っていった。標高 597 メートルの峠に着いた時はすでに夜となり、空高くに月があった。スティーヴンソンはここで月の光を浴びながらモデスティヌと少しの間だけ休息を取った後、すぐに峠を下り、午後 10 時前にはサン=ジャン=デュ=ガール (Saint-Jean-du-Gard) の宿屋にたどり着いている (『ロバ』 143-145 頁/pp.193-194.)。この日のスティーヴンソンとモデスティヌの旅の行程は、かなりの強行軍であった。

サン=ジャン=デュ=ガールは、すでにもうジェヴォーダン (ロゼール県) ではない。ガール県北部の小規模な地方都市である。ロゼール県南部とガール県北西部とを結ぶ交通の要所

の1つである。街にはプロテスタントの寺院の他に、街の中心のマルシェ広場に、12世紀にサン＝ジルのベネディクト派修道士によって建てられたサン＝ジャン＝バティスト教会の塔と、その土台部分に教会の壁の一部が残っている。このロマネスク期の教会自体は、宗教戦争の際に、国王軍がこの街で行った虐殺への復讐として、プロテスタントによって1560年に破壊された¹⁵。残された壁の石積みと大きなアーチから、この教会が精巧に建てられた立派なものであったことが推し量られる。第13日目(10月4日)スティーヴンソンは、しかしおそらくこうした歴史的な名所を訪ねる時間もなく、昼にはモデスティーヌを売り払っている。モデスティーヌはこれまでの強行軍がたたって、このまま歩き続けることが不可能になっていた。何日かの休息が必要であったが、アレスの街に急ぎたいスティーヴンソンは、ここでモデスティーヌとの旅に終止符を打ったのである。ル・モナステイエを出発してから12日間の旅であった。スティーヴンソンはサン＝ジャン＝デュ＝ガールからアレスに向かう馱馬車の中で、モデスティーヌのことを思い出しながら感情にまかせるまま泣いたのであった(『ロバ』146-147頁/pp.195-196)。

そうまでしてスティーヴンソンをアレスに急がせた理由は、いったい何であったのだろうか。旅行記には、アレスに届いているはずの手紙などを見たくて仕方がなかったからとだけ書かれている。しかし私たちには、どうしてもそれが、離婚訴訟のためにアメリカに戻ったファニー・オズボーンから届いていたかも知れない手紙を、スティーヴンソンがアレスで読みたい一心であったのではないかとの推測を禁じ得ない。そうでなくとも、スティーヴンソンの脳裏には、旅行中も常に彼女への想いがあり続けていたのであろう。小沼氏は「この旅行記には、海の彼方にいるファニー・オズボーンへの思慕が絶えざる伴奏を奏でている[……]スティーヴンソン自身、この旅行記のなかにファニー・オズボーンに対する恋文を数多く挿んでおいたと言っている」と指摘している¹⁶。実際、スティーヴンソンはこの徒歩旅行の翌年(1879年)には、ファニーに会うためにアメリカに渡ったのであった。

4. スティーヴンソンの旅と自己省察

ここまで、彼が歩いた道を実際にたどりながら、スティーヴンソンの旅の様子(彼が訪れた場所や彼が見た光景など)を、具体的に確認してきたのであるが、以下ではロバのモデスティーヌと共に歩いたジェヴオーダンの旅の中で彼が行った自己省察について見てゆきたいと思う。旅行記『旅はロバをつれて』には、先に触れたように、愛する女性に対するスティーヴンソンの想いが散りばめられているのではあるが、もちろんそれにとどまらず、スティーヴンソン自身の、旅を通して得られるさまざまな自己省察が込められた作品でもある。徒歩による一人旅と言っても、ロバを連れているので厳密には完全に孤独な旅というわけではないが、しかしそれでもやはり「一人」旅であることには変わりがない。この旅の伴侶は、話しかけても何かを言葉で答えてくれるわけではない。しかもフランスの中でもとりわけ人

影まばらでしばしば荒涼とした肌寒い高原地帯を、野宿も交えながら歩いて行くという旅である。歩みを進める中で、旅人はどうしても自己自身と向きあわざるを得ないであろう。そして旅人の思考は、必然的に自己と対峙する孤独な自己省察という形を取るであろう（これはある意味で、中世の巡礼と相似ているかも知れない。実際ル・ピュイからジェヴォーダンをへてトゥールーズ方面に行く道は、中世以来、有名なスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路にあたる）。

彼は旅の中で多くのことを省察の俎上に載せているが、そのテーマとなっているものは、次の2つのことに大きく分けられると思われる。すなわち、自然と宗教である。もちろんここで言う「宗教」には、カミザール戦争にまつわる血塗られた歴史の話も含まれる。

ジェヴォーダン（ロゼール）やセヴェンヌの自然については、その雄大さ、豊かさ、すがすがしさ、そしてまた時には荒涼とした厳しさについて、この旅行記の全編にわたってさまざまに語られている。すでに見たように、ランゴーニュあるいはシェイラル＝レヴェックあたりからリュックにかけての自然描写は、寒くて荒涼とした土地がどこまでも続く不毛な丘陵地帯の暗さを伝えるものである。第7日目に野宿するロゼール山あたりまでの様子も、概してこのようなジェヴォーダンの自然の厳しさを強調するという基調で記述されている（それ以降も、例えば第11日目にあたる10月2日のカサニヤスあたりの自然描写は大変に厳しい）。

しかしジェヴォーダンの自然の美しさやすばらしさについてのスティーヴンソンの省察がとりわけ深められるのは、彼が人里離れた場所で野宿（キャンプ）をする時のことである。彼は12日間の旅のうち、都合4回野宿をしている。最初は第3日目（9月24日）の夜のこと、場所はメルコワールの森の中（Fouzillac 付近）であった。強い風が絶えず木々を揺らす暗い森の中で、スリーピング・バッグの中に横たわり、ジェヴォーダンに吹く風の音を聞きながら、そして南フランスの夜の空にまたたく頭上の星を眺めながら一夜を明かした。スティーヴンソンはこの夜の自分のことを「陸の上の漂着者（an inland castaway）」（『ロバ』49頁／p.127.）のようだと記している。

2回目の野宿は、第7日目（9月28日）で、場所はル・ブレイマールからロゼール山の北側斜面を登ってゆく途中の松林の中であった。ここでのスティーヴンソンの記述は、最初の野宿の夜よりもさらに詳細である。そこで最初に語られるのは、やはり夜空に輝く星のことである。夜の自然の容貌や星の歩みは、夜露や夜の匂いととも、刻一刻と変化してゆく。自然の静かで密やかな動きが、星とともにスティーヴンソンを包み込んでいる。彼は星の輝く夜空を見上げながら、「文明の牢獄（the Bastille of civilisation）を逃れ、しばらくの間、単なる善良な動物として、自然に飼われている羊の群れの一匹となっていると思うことに、特殊な喜び（special pleasure）が存するのである」（『ロバ』89頁／p.157.）と述べている。

南フランスでは、地中海地域の他の多くの場所と同じように、「星」はとりわけ特別な存在としてさまざまな場面に登場する。貴族や領主あるいは村や街の紋章、教会装飾、絵画、文学作品などなど。しかもそれは時代を超えて存在すると言ってよい。あちこちの村々に建

つロマネスク教会の装飾彫刻からポスト印象派の画家ゴッホの絵（例えばプロヴァンスで描かれた「星月夜」や「ローヌ川の星月夜」）に至るまで、その内容は実にバラエティに富んでいる。そうした中でも、私たちはここで、同じ南フランスを舞台に書かれた文学作品のひとつであるアルフォンス・ドーデーの短編「星 (Les Étoiles) —プロヴァンスのある羊飼いの物語」を思い起こすことができる。この作品は、『風車小屋だより』の中の一編である（『風車小屋だより』の出版は、スティーヴンソンのロバ旅行のわずか9年前の1869年のことであった）。夜のリュブロン山の上で、ある羊飼いの青年が、日頃から密かに想いを寄せる村の「お嬢さん」と並んで座りながら、彼女に目の前の星々について話して聞かせる。ひときわ目につくのはフランスからスペインへと大きな帯のように連なって流れてゆく星の河、すなわち銀河（聖ヤコブの道）である。二人の目の前をプロヴァンスの夜空に輝く満天の星々が、まるで羊の群れのようにゆっくりと巡る。さらに羊飼いが彼女に「星の嫁入り」について話して聞かせるうちに、「お嬢さん」はいつの間にか眠りに落ちてしまうのであった。

「二人を巡って星は羊の群れのようにおとなしく静かな歩みを続けた。そうして私は、幾度も幾度も、この星の中で一番きれいな一番輝いた一つの星が道に迷って、私の肩に止まりに来て眠っているのだ、と胸に描いていた。」¹⁷

ジェヴォーダンの夜が今にも明けようとするその時に、静寂の中でスティーヴンソンが見た南フランスの夜空の星々も、同じように美しくまたたいていた。目の前にあるのはやはり銀河であった¹⁸。

「星は澄んだ光で輝き、色づいていて、宝石のようだったが、寒そうな感じはしなかった。微かな、銀色をした煙のように見えるのが銀河 (the Milky Way) だった。[...] 私はぼんやり煙草を吸いながら、我々が空と呼ぶことにしている空間の広がり眺めていた。」（『ロバ』90頁/p.157.）

そしてスティーヴンソンは、ジェヴォーダンの黎明を広大な自然のただ中で感じ取りながら、騒々しくて堅苦しい諸々の物質的なものに囲まれた日常的な「文明の牢獄」から遠く離れた状態にある、そのような「私自身というものの静謐な所有 (serene possession of myself)」（『ロバ』90頁/p.157.）を深く味わうのである。自己自身を静けさのうちに「所有」する喜び、自己の内部に自己自身を静かな気持ちを持って保ち、そうした自己自身とあらためて向き合うこと。かつてミシェル・フーコーは、古代ローマ時代のストア派の中に、静かな境地で自己と向き合い、自己をまなざし、そして自己自身を入念に吟味しながら倫理的な生を送ろうとする哲学の形式を見だし、それを「自己への配慮 (sousi de soi)」と呼んだ¹⁹。スティーヴンソンの自己省察も、ストア派のそれと一まったく同じものではないにせよ一相通じるものがあると言えよう。自己の所有こそは、自己省察の必須条件なのである。

スティーヴンソンの自己省察が展開されるもう一つのテーマは、宗教である。言うまでもなく彼自身はスコットランド人であり、プロテスタントである。ロバをつれたこの旅のあちこちで、スティーヴンソンは18世紀に南フランスのジェヴォーダン、そしてとりわけその東南部にあたるセヴェンヌで繰り広げられた「カミザール戦争」（プロテスタントの反乱）について、歴史的想像力を発揮しながら、しばしば非常に詳しく記述している。旅の第7日目、9月28日にル・ブレイマールを発った後ロゼール山を越えて、彼が「カミザールの国」と呼ぶ地域（セヴェンヌ）に入ってからそれはそれが顕著となる。カミザール側のリーダーであるローランやカヴァリエについてのスティーヴンソンの記述は実に生き生きとしている。「カミザール戦争（La guerre des Camisards）」は、フランスにおける新教の自由を認めたアンリ4世の「ナントの勅令」を、1685年に国王ルイ14世が廃棄し、プロテスタント（ユグノー）に対する弾圧と改宗の強要を行ったことに対して、1702年から1705年にかけて、ラングドックの、とりわけセヴェンヌ地方（ジェヴォーダン南部）において繰り広げられた宗教戦争である。この時のユグノーのことを特に「カミザール」と言う。反乱鎮圧のために派遣された圧倒的な国王軍に対して、カミザールたちは、セヴェンヌの山や谷に身を隠しながら、もっぱらゲリラ戦を展開して対抗した²⁰。スティーヴンソンの記述が詳細となるのは、ル・ポンドゥ=モンヴェール（9月29日）、フロラック（9月30日）、カサニヤス（10月2日）、そしてサン=ジェルマン=ドゥ=カルベルト（10月3日）である。しかしそうした宗教戦争についての記述のほか、スティーヴンソンがプロテスタントとカトリックの関わりについて、その省察を深めるのは、第5日目（9月26日）、トラピスト修道会の「ノートル=ダム=デ=ネージュ修道院」（雪の聖母修道院/L'Abbaye Notre-Dame-des-Neiges）に宿泊した時の体験についてであった。

このトラピスト修道院での滞在についての記述は、旅行記の中でもかなりのスペースを割かれている。宿屋泊まりと野宿を繰り返す今回の旅の中で、プロテスタントであるスティーヴンソンが、わざわざカトリックの修道院に宿泊するということには、はたしてどのような意図があったのであろうか。カミザール戦争の地を自分の足で歩いて回るに際して、カトリックについて、異なる宗派について、そして宗教的な対立ということについて、自分の肌で直接体験し考えてみたいというスティーヴンソンの思いがあったのではなからうか。カミザール戦争からおおよそ170年以上たった19世紀も後半のことである。血なまぐさい宗教的な対立は過去のもものではあるが、それにしても依然としてプロテスタントとカトリックの間にある壁は低くはないことが、旅行記から読み取ることができる。細い道を修道院に向かっていくスティーヴンソンが感じたのはまず何よりも「恐怖」であった。

「私は一生のうちに、ある場所に近づいて行くのに、この時ほどの恐怖を覚えたことはめったにない。それは私が受けた新教徒としての教育の結果に他ならなかった。そしてある道の曲り角に来て、突然私は完全に恐怖の一盲目な迷信的な恐怖の虜になった。

[...] 私は知らない間に生死の境界線を越えて、死の国に足を踏み入れた人間のように、

およそゆっくり歩いて行った。」（『ロバ』 60 頁／p.136.）

プロテスタントには一部の例外を除いて修道院が存在しないので、修道院（僧院）という世界が、スティーヴンソンにとっては未知のもの、得体の知れない場所であったのであろう。実際、到着してみるとその修道院は「寒々とした、陰気な感じ」（『ロバ』 65 頁／p.139.）がした。スティーヴンソンは「アポリナリス」という神父に案内されて受付に向かった。そしてそこで交渉の結果、宿泊を許され、一夜を過ごすことになった。スティーヴンソンが旅行記で強調しているのは、何から何まで厳格な規律・戒律に則った修道士たちの振る舞いである。修道士たちの孤独については「どうして彼らがそのような厳粛な、陰鬱な孤立に耐えていけるのか解らない」（『ロバ』 69-70 頁／p.142.）。修道士たちが死ぬ際には僧衣を着たまま、ただひたすら沈黙のうちに祈り労働した生涯を閉じることについて、驚きをもって書き記している（『ロバ』 71-72 頁／p.143.）。スティーヴンソンは午前 2 時に礼拝堂へ向かってゆく修道士たちのことを「この世に生きることを断念した亡者たち (the dead in life)」（『ロバ』 72 頁／p.139.）とまで呼んでいる。

しかしスティーヴンソンは、カトリックの修道院の禁欲的で暗い面のみを強調しているわけではない。彼は、ここでも冷静な自己省察を続けて「私は宗教上の規律にこのような世俗的批判を加えることに、何か後ろめたいものを感じる」（『ロバ』 70 頁／p.142.）と述べる。これは、とすれば自身の宗派に固執して他の宗派を攻撃する傾向に陥りがちな自己の思考に対する批判的な意識が働いていることを意味している。そして具体的には次のように、修道院の生活の積極的に肯定すべ点を挙げてゆく。すなわち、修道院の食事は簡素であるにもかかわらず、非常に健康そうに見える修道士たち（「私はこれほど幸福そうな、元気な人間の集まりを前に見た覚えがない」（『ロバ』 69 頁／p.141.））。人間の精神に安定を与え、肉体の有益な活動を可能にしてくれる修道院の鐘の音と規則正しい毎日の生活（「本当に辛いのは愚鈍な人間になり終わって、我々の生活を、我々が愚鈍であるゆえに台無しにする自由を与えられることなのである」（『ロバ』 71 頁／p.143.））。一日に何度もある礼拝堂での儀式（プロテスタントから見るとカトリックの胡散臭さを象徴するのがこの「儀式」である）でさえ、スティーヴンソンはそこに身の引き締まる思いを認めている（「儀式の峻厳な素朴さは、ロマン的な環境に引き立てられて直接に私の胸に伝わってきた。」（『ロバ』 72 頁／p.143.））。確かに最初にこの修道院に近づいた時に感じたのは「恐怖」であったかも知れないが、実際にそこで生きる修道士たちに接することで、そうした恐怖心は溶解し、修道院の世界に対する理解がこうして大きく進んだのである。

そもそもスティーヴンソン自身、あらゆる宗教に対してそれらを平等に考え、人間生活に対する効用を等しく認め、何か一つの絶対的な宗教の立場から別の宗教の価値評価を行うことには抵抗を感じる人間である（『ロバ』 78 頁／p.147.）。異なる宗派や異なる宗教に対する姿勢は、最初から柔軟なものであった。むしろ頑なに自らの宗派や宗教を強要してくる者に対して批判的なのである。スティーヴンソンは、修道院に宿泊したこの夜、同泊した「司

祭」と「元少佐」に改宗を迫られ続け、半ば辟易としている。しかし、彼は偏狭かつ頑なに自身の思想信条を他者に強要する態度に批判的であると同時に、自分自身の思想信条を簡単に変えてしまうことのできる人々にもまた批判的である。スティーヴンソンは、あくまでも自分自身の思想信条はしっかりと確保したうえで、批判するべきは（あるいは批判されるべきは）そうするべきであると考えている。そこには自己の考え方をしっかりと客観化して見詰め、その歩むべき正しい道を模索しようとする省察の姿勢が認められるのである。彼は第12日目（10月3日）、サン＝ジェルマン＝ドゥ＝カルベルトで二人のカトリック信者と昼食をとりながら信仰について議論をした後、次のように述べている。

「私としては、私の今までの宗旨を棄てて、ある種類の言い方を他の言い方で変えるよりも、勇気ある読み方〔解釈〕によって、精神と真実のうちにそれをしっかりと抱きつつ、他の宗派の優れた人々と同じように、間違ったことは、間違っていると認めたいと思う。」（『ロバ』142頁／p.193.）

おわりに

スティーヴンソンの今回の旅の伴侶であるロバのモデスティーヌに、彼が想いを寄せるアメリカ人女性ファニー・オズボーンの姿を重ねるのは容易なことであるかも知れない。それでなくとも、彼の旅行記には全編にわたって「愛する女性」や「女性への愛」などといった言葉が散りばめられている。しかしそれと同時に、この作品はスティーヴンソンがまだ若い時代、すなわち作家としての、そして男性としての、つまりは一人の人間としての、将来に対する不安や焦り、そして希望が混じり合ったそんな時代に、彼があらためて自分自身に向き合うために出かけた旅を記録したものであった²¹。そこには、徒歩による一人旅を経験するなかで、真摯に自己との対話を試みようとする作家の姿勢が認められるのである。それは、フーコーの言葉を借りるなら「自己への配慮」の、スティーヴンソンなりの試みである。しかしこの「配慮」という言葉は、言うまでもなく「思いやる」とか「大切にすること」といった意味だけではない。この「自己への配慮」は単なる「自己愛」なのではない。それは、冷静な気持ちで静かに自己と向き合い、そうすることで自己と対峙し、自己自身を分析し、自己のあり方を吟味することを意味する。それは高度な自己省察のあり方なのである。スティーヴンソンに、そうした自己省察のための格好の機会を与えたのが、他ならぬ南仏ジェヴォーダン地方の自然と歴史であった。ここは、フランスの他の地方に比べると、あまり脚光を浴びる場所であるとは言えない。今日でも観光客などはそれほど多くはなく、人口密度も低い。人間よりもオオカミ（ジェヴォーダンの獣）によって、そしてまた華やかな文化よりも血なまぐさいカミザール戦争によって、ようやく知られる閑散として暗い高原地帯というイメージも強い。しかしそれだからこそ、孤独のうちに自分自身と向き合おうというスティー

ヴンソンの旅には最適の地であったのであろう。彼と同じように、この地方の山々を黙々と歩く現代の「ランドネ」（高地ハイカー）たちも少なくない。今でも南仏ジェヴォーダン（ロゼール）は、自己省察に最適な土地のひとつなのだと言えるのかも知れない。

注

- 1 よしだみどり『物語る人(トウシターラ)―『宝島』の作者R・L・スティーヴンソンの生涯』毎日新聞社、1999年、244-247頁。
- 2 本稿では次のものを参照した。Robert Louis Stevenson, *An Inland Voyage, Travels with a Donkey*, London, The Silverado Squatters, J. M. Dent & Sons, 1925/1960.
- 3 スティーヴンソン『旅は驢馬をつれて』吉田健一訳、岩波文庫、1951年。また小沼丹氏による最近の邦訳もある。小沼丹訳『旅は驢馬をつれて』みすず書房、2004年。これは1955年に角川文庫から出されたものを底本にしている。
- 4 英語の原文には《the steep descent》とある。
- 5 吉田訳では「シェイラル・レヴェツリ」とあるが「シェイラル・レヴェック」の誤りであろう。『ロバ』38頁／p.121.
- 6 レ・ショワジネのパンフレット。 <http://www.choisinaif/>（2015年11月1日アクセス）
- 7 information sur place.
- 8 Jacques Morel, *Guide des Abbayes et Priuré, Languedoc-Roussillon*, Lyon, Autre Vue, 2007, p.95; Anne Trémolet de Villers, *Églises Romanes oubliées du Gévaudan*, Montpellier, Les Presses du Languedoc, 1998, p.234.
- 9 Rémy Chastel, *Églises de Lozère*, Paris, Art et Tourisme, 1981, pp.19-22; Jean-Marie Pérouse de Montclos, *Languedoc-Roussillon, Le Guide du patrimoine*, Paris, Hachette, 1996, p.279; Anne Trémolet de Villers, *op. cit.*, pp.251-252.
- 10 Rémy Chastel, *op. cit.*, pp.19-22; Jean-Marie Pérouse de Montclos, *op. cit.*, p.279; Anne Trémolet de Villers, *op. cit.*, pp.251-252.
- 11 Anne Trémolet de Villers, *op. cit.*, pp.270-272.
- 12 *Ibid.*, p.420.
- 13 英語の原文では《Plan de Font Morte》となっていて、吉田健一訳でもそのまま「プラン・ド・フォン・モルト」としている。少なくとも現在の地名表記は《Plan de Fontmorbt》「プラン・ド・フォンモール」なのでそれを採用した。
- 14 information sur place.
- 15 information sur place.
- 16 訳者自身による「解説」。スティーヴンソン『旅は驢馬をつれて』小沼丹訳、みすず書房、2004年、175頁。
- 17 アルフォンス・ドーデー「星 ―プロヴァンスのある羊飼いの物語り」、『風車小屋だより』桜田佐訳、岩波書店、1958年、所収、43-45頁。
- 18 スティーヴンソンは、第10日目(10月1日)の夜にミマント川溪谷の樫の木々の林で野宿した際にも、同じように「星」の魅力について語っている。曰く、美しい星空を見ながら屋外で寝たことのない者には星の美しさは分からない、星こそは最も古典的な詩人なのである云々(『ロバ』126-127頁／p.183.)。
- 19 Michel Foucault, *Le souci de soi, Histoire de la sexualité*, tome 3, Paris, Gallimard, 1984. 『性の歴史Ⅲ―自己への配慮』田村徹訳、新潮社、1987年。
- 20 カミザール戦争について、反乱を起こしたプロテスタント側から書かれた記録は、カヴァリエ『フランス・プロテスタントの反乱 ―カミザール戦争の記録』(二宮フサ訳、岩波書店、2012年)で読むことができる。
- 21 中島俊郎『イギリス的風景 教養の旅から感性の旅へ』NTT出版、2007年、170頁。

【2020年8月改訂PDF版】